



CONTENTS

湖医会賞を受賞して.....	猪飼秋夫	2
理事（副学長）就任.....	永田 啓	4
理事（副学長）退任.....	山田尚登	6
教授就任	八尾武憲	7
教授退任	堀江 稔・小森 優	8
私の研究から	福本 巧・安田 新	10
地域の病院に想う	山本正仁	15
私の仕事場	川口剛史・大林知華子	16
著書の紹介	中島滋美	19
支部会 鹿児島支部	迫田 悟	20
大阪支部	江口 豊	21
同期会 30年	駒田佳子・根本久高	22
20年	荻田謙治・金崎雅美	24
10年	加藤紀子・下村昭彦・中村琢弥	26
浜松医科大学交流会	住友志帆・前川卓人・垣内泰生・佐野颯人・松藤忠和・島袋正樹・金田章真	28
訃報		31
事務局から	総会案内 ほか	40

湖医会賞を受賞して



外科医を育てること

静岡県立こども病院 副院長 猪飼 秋夫 (医8期)

この度は、栄誉ある湖医会賞を賜り、大変光栄であります。また御推挙戴きました井上慶郎先生、また選考下さいました幹事の先生方に改めて感謝し、御礼を申し上げます。

私は、昭和63年に大学を卒業し、今年卒業30年の節目になります。卒業後すぐに母校を離れ、母校の発展を尊に聞き、何かお役に立てないかと思っておりました折り、奇しくも昨年心臓血管外科学講座浅井徹教授のご高配により、非常勤講師として講義をさせていただき、今回このような名誉ある賞を賜り、母校との深い縁を改めて感じています。

さて、私の専門は小児心臓外科です。小児心臓外科を目指したきっかけは、4年生の臨床講義の中で、当時の第二外科森渥視教授の算数の問題を解くように理路整然とした理論的な講義に興味を刺激されたことから始まります。大学卒業後、京都大学心臓血管外科伴敏彦教授の医局に入局しました。大学の2年間の研修中は、先天性心疾患大好きオーラを発し続け、念願叶って静岡県立こども病院への赴任を命ぜられました。偶然か必然かはわかりませんが、自分の目指したい事を示す

という姿勢が功を奏しました。

静岡県立こども病院で、二人のmentorに会いました。一人は横田通夫先生、もう一人は現在のこども病院院長の坂本喜三郎先生です。若輩の私に必ず先生の敬称を付けて呼んでくださる横田先生からは、医師としてどんなことがあっても患者から逃げ出さない姿勢、そしてすべての人から教えるを授かることが出来ることを教えて頂きました。坂本先生には、未来を見据えた上で今を生きる姿勢、患者の為に深い洞察力で治療を構築する考え方を今も教えて頂いています。偶然が重なり、30代半ばで一人で手術をさせて頂く機会を得、この世界で生きていく覚悟が出来ました。

小児心臓外科の世界は決して広くなく、その道を歩むにつれ、患者の為に最善を尽くすためには、世界一流の外科医の技と考え方を身につけなければ道は極められないという思いが強くなりました。大学に帰学し、海外留学の足がかりとなる学位研究を行うことを決め、誰もやっていない先天性心疾患の手術モデルの実験を行いました。このモデルのデータを携えて、日本人が誰も留学

——自分の足跡を振り返って——

したことがない米国 UCSF の Dr Hanley, Dr Reddy の元に何度も足を運び、最終的に研究臨床留学の約束を取り付けました。

留学してすぐ、この team 全体が Stanford 大学に移籍しましたので、奇しくも名門 Stanford 大学で働くことになり、最初の2年は研究、後の1年半は臨床を行いました。外科医として臨床経験を積むことが最終目的でしたので、研究で足跡を残すために2本の論文を仕上げつつ、その時に備え、研究の間も朝6時からの fellow round にずっと参加していました。臨床では、Dr Hanley

は極型ファロー四徴症、主要体肺側副血行路に対する unifocalization という日本ではまだ行われていない手術を世界で最も多く行っており、その技術を取得することを目標としました。臨床での驚きは、その技術もさることながら、外科医である彼らが教育者の姿勢を貫いていることでした。若手医師に難易度の高い手術を教えることは非常に難しいのですが、fellow に手術をさせ、lecture を行うという教育者の姿勢が、彼の地の mentor にはありました。またどんな質問にも答えてくれるという環境がそこにあり、やらせて育てる教育で自らを育てて頂き、教えることが名誉であると感じられたことは非常に有意義でした。

留学後、一旦静岡県立こども病院で働いた後、縁があり、岩手医科大学に小児心臓外科部門の責任者として赴任しました。岩手では、4人のmentorからの教えから、unifocalization の技術を確立し、患者の為に最善をつくしつつ、やらせて育てる教育を実践することを目標としました。

幸い優秀な若手に巡り会え、10年間で独り立ちできる外科医として育て

ることが出来ました。しかし私の現役として残された期間が10年となり、もっと多くの外科医を育て、まだ為し得ていない unifocalization の技術を確立するための環境を求めて、岩手を辞し、静岡県立こども病院に戻るという決断をいたしました。ここでも馬鹿正直に自分の目指したい事、遣りたいことをやるという姿勢を貫きました。

外科医を育てることは難しいです。医療を継続させるためには、次世代の中から育てる対象となる人を見つけなければなりません。そのためには自分の興味があることを分かり易く人に伝え、如何に共感を得られるかが大切だと思います。また指導する外科医として、患者に対しての責任に如何に対峙できるか。そこには知識と経験の裏付けが必須ですし、患者、疾患への深い洞察力が必要となります。命に直結する心臓外科という仕事の頂はまだ先ですが、技術のみならず人を育てられる外科医を目指して、今回の受賞を機に更に精進させて頂きます。栄誉ある賞を賜り誠にありがとうございます。



副学長就任

● 副学長・理事って
どんな仕事?
 理事・副学長
永田 啓 (医2期)

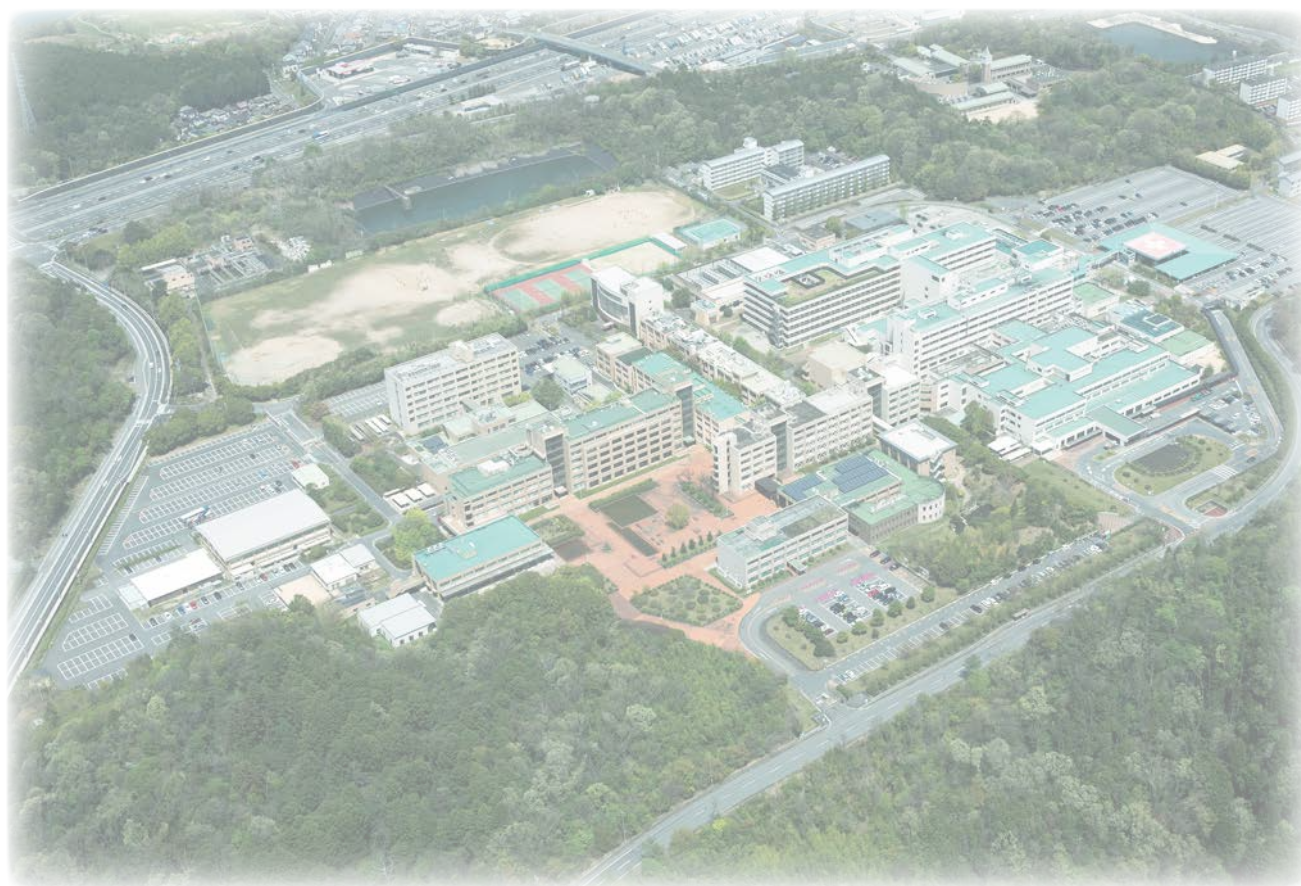
3月末某日、山田先生の3月いっぱいでの副学長退任と教授退官が急遽決まり、後任として学長から私が指名されました。急な事だったため、4月からの私の予定がすでにほとんど決まっていたので、それからが大変でした。結局、医療情報部の教授は1年間併任、小森先生が定年退職され後任の選考が終わる10月か11月まではマルチメディアセンターに関してもすべて面倒を見る、ということで、かなりばたばたした状態でのスタートとなりました。

もともといろいろな委員会のメンバーになっていたのと、副学長と教授の併任でそれぞれの会議にどういう立場で出たらいいのか、委員を変わった方がいいのか、といったいろいろなことがあり、4月から5月にかけては試行錯誤

という状態でした。おそらくこうした状態は今後もしばらく続くと思われます……

こんな状況もあり、学長や他の理事の方々がいろいろと考えてくださり、理事の役割分担が組み替えになりました。それが下の表です。山田先生は教育担当も兼ねていたのですが、教育担当は小笠原先生になり、逆に監査などの評価系は私のところに、といったふうに担当する仕事の割り振りが変わっています。多くの方々は、単純に山田先生がやっていた仕事が私のところに移ったのだと思っていて、教育に関する意見や理事になったのに教育の事で責任のある対応をしないのはなぜかといった批判をもらって、そのつど、担当が違うので……といった説明をしたりしています。

担 当	氏 名	所掌事項	特命事項	関係事務部門
副学長 理事 (企画・評価・渉外等担当)	永田 啓	企画・評価、監査、図書館、 情報収集分析、 情報セキュリティ、広報、 渉外・社会連携 等	大学評価(年度計画、実績報告)、 IR整備、大学広報、基金対応	企画(IR担当)課、 監査室、図書館、 情報総合センター



私は、師匠の稲富昭太先生が以前副学長をされていたことや、学生生活支援部門長を長年やっていたので、副学長のところには結構出入りしていました。なので、理事＝副学長の仕事は大体こんなものだ、と知っているつもりだったのですが、見るとやるとでは大違い、ということが、実際になってみると身にしみています。特に法人化以降の理事は、相当な実務が割り振られていて、いろんな事務部門の課の責任者だったり、全国や全国立大学の会議や、持ち回りの担当校の仕事やら、日々のややこしい案件の相談や処理といった分類できない仕事が押し寄せて、結構大変です。山田先生がとっても疲れていた状況がよくわかりました。

国立大学法人の理事は法律でそれぞれの大学で人数も決まっており、滋賀医大は4名です。もともと3名かな、と思っていたのですが、副学長室に今も残る昔の在学ランプ(写真)を

見てももともと4名ようです。法人化後は学長1名・監事2名・理事4名という形で、役員会があり、雇用側はこの人数だけで、他の職員はすべて被雇用者ということになります。3月まで教職員団体の会長だったので、そのあたりは理解していたつもりだったのですが、結局理事は就業規則の対象ではないのです。なので事故等に対する保険も別に入らなければなりません。「今度、年休を取りたいのですが」と言ったところ、「理事には年休の概念はありません」とのこと。四六時中理事としての意識を持ってください、と言われたのですが……

このように?がいっぱいつく日々で、それはそれなりに面白いので、みなさんに時々報告をしていきたいと思っています。「大丈夫か?」と思われる方もおられると思います

が、任期の2年間、自分流にがんばりたいと思いますので、いろんなアドバイスをや提案など、よろしくお願いします。



**副学長
退任****ごあいさつ**

杏嶺会 上林記念病院 院長

山田 尚登(医2期)

平成19年3月に4代目の滋賀医科大学医学部精神医学講座教授として着任し、平成26年4月からは附属病院副院長を併任し、平成28年からは塩田浩平学長の任命により、教育広報渉外等担当理事・副学長として仕事をさせていただきました。この度、平成30年3月をもって滋賀医科大学を退任いたしました。在任中は公私にわたり多大なご支援をいただきました。支えていただいた皆様方に心より感謝申し上げます。

振り返りますと、様々な思い出が蘇ってきます。母校の滋賀医科大に戻った時は新研修制度開始の数年後であり、講座のスタッフは減少し3名のみでした。私の最初のミッションである講座立て直しを一生懸命行っているうちに瞬く間に時が過ぎていきましたが、非常に有意義で充実していた時期であったと思います。平成21年～平成25年まで滋賀医科大学教職員団体(過半数代表者)の長として働かせていただきましたが、事務の垣江さんや素晴らしいスタッフの協力で、業務を遂行することができました。組織率が30%から70%へと国立大学トップに上昇した際には、とてもうれしかったです。副病院長の時は、初期研修医の確保と新専門医制度への対応の2つが特に大切なミッションでした。最後の2年間は理事(教育・広報・渉外等担当)・副学長をさせていただきました。医学教育分野別評価への対応、Post CC-OSCEなど新しい医学教育のためのハードとソフトの充実、古くなっていた滋賀医大の入学試験制度改革、ホームページやプロモーションビデオの新たな作製、大学の寄付金制度の構築などが重要なミッションでした。振り返れば11年間の在職中は楽しい思い出ばかりです。ありがとうございました。吉川学長、馬場学長、森田病院長、柏木病院長、皮膚科の田中教授、救急の江口教授、内科の前川教授、漆谷教授、脳神経外科の野崎教授…、その他数多くの皆様、感謝しています。湯浅課長、加藤課長をはじめ学生課や企画課の皆さん、楽しかった。

最後になりますが、名誉教授ならびに客員教授の称号を付与していただきありがとうございます。現在は、我が家(岐阜)から通勤可能な精神科医療機関(上林記念病院)に勤めています。地域精神医療に貢献しつつ、妻と大切な時間を過ごすことを現在のミッションとしています。

教授就任 ごあいさつ



大阪経済大学 人間科学部 教授
八尾 武憲 (医20期)

この度、4月1日付けで大阪経済大学 人間科学部 教授を拝命いたしました。

昭和7(1932)年に開学した大阪経済大学は大阪市東淀川区にあり、博多方面に向かう新幹線で新大阪に到着する前、進行方向左側にキャンパスを見ることができます。平成14(2002)年に人間科学部が開設され、所属するスポーツ健康コースの他には現代心理学コース、メディア社会コースがあります。スポーツ健康コースでは、スポーツによる健康増進やコーチング技術、スポーツビジネスといった教育が行われています。常勤教員では唯一の医師で、病院勤務時よりも医師であることを強く自覚させられます。また、専門分野である不整脈領域(循環器内科)よりも、医学一般の広い知識や医師としての見解を求められることが多いため、臨床現場とは違った緊張感があります。

現在、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに向けてスポーツが非常に注目されています。そこで、担当する授業では健康増進を目指した安心・安全な

スポーツのために、運動が予防に効果的となる生活習慣病などの疾患の知識や、適切な運動量の設定について、さらに、スポーツ中の突然死やオーバートレーニングによる内科的障害などを講義しています。研究では、専門分野である心電図などの生体情報を活用して、アスリートの健康やパフォーマンス向上につながる検討を行っていきたいと考えています。測定機器などがほとんどない状態からのスタートで、まずは実習用に聴診器や血圧計を購入するところから始めています。なお、臨床現場から完全に離れた訳ではなく、出張での不整脈のカテーテル手術(アブレーション)も引き続き行っています。

最後になりましたが、学生時代、研修医時代、大学院時代、そして臨床現場でお世話になった多くの皆様に、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。こうして教授の命を授かったのは皆様の御指導・御鞭撻の賜物であり、これからもそのご恩に報いることの出来るよう精一杯頑張ってお参ります。皆様のご健康とますますのご活躍をお祈りいたします。

[略歴]

- 平成12年 3月…滋賀医科大学医学部医学科 卒業
- 平成12年 4月…滋賀医科大学医学部附属病院第一内科入局 医員研修医
- 平成13年 4月…滋賀医科大学大学院 医学系研究科 生体代謝調節系 入学
(平成13年5月～平成17年3月 国立循環器病センター研究所 研修生)
(平成13年12月～平成15年3月 独立行政法人通信総合研究所 研修生)
- 平成17年 3月…滋賀医科大学大学院 医学系研究科 生体代謝調節系 修了(博士 医学)
- 平成17年 4月…滋賀医科大学医学部附属病院 呼吸循環器内科 医員
- 平成21年11月…岡村記念病院 循環器内科 不整脈センター長
- 平成25年 4月…一般社団法人 情報通信医学研究所 主幹研究員 循環器内科学(兼任)
草津総合病院、恵寿総合病院、第二岡本総合病院 非常勤医師(兼任)
- 平成26年 6月…国立循環器病研究センター 派遣研究員(～平成27年 兼任)
- 平成26年 9月…アメリカ ロサンゼルス Good Samaritan病院 留学(～11月)
- 平成27年 9月…京都岡本記念病院(旧 第二岡本総合病院)循環器内科 医長
- 平成29年 9月…医療法人マックスール 巽今宮病院 内科
- 平成30年 4月…大阪経済大学 人間科学部 教授

教授退任

ごあいさつ

Department of 呼吸循環器内科と私 Cardiovascular Medicine



内科学講座(循環器・呼吸器)教授

堀江 稔

今般、定年により滋賀医科大学を退職することになりました。湖医会の皆様には、たいへんお世話になりありがとうございました。小生、平成14年11月滋賀医科大学医学部第一内科学講座教授(現、内科学講座(循環器・呼吸器内科))に就任し、爾来15年5か月にわたり、教育・研究および診療に従事させていただきました。

第一内科学講座(現在の呼吸循環器内科)は、滋賀医大の最初の臨床講座として1975年に開設された教室です。創設に尽力された河北成一教授、また、大きな発展に貢献された木之下正彦教授のお二人が大切に育てられた後、2002年に引き継がせて頂きました。開設27年目のことで、今春教室は創立43年を迎えます。同門会員も250名を越えました。私の赴任直後の2004年に始まった新臨床研修制度のため、2年間まったく入局者がおらず(これはすべての診療科でそうではありませんでしたが)、さらに卒業後の選択肢が広がった結果、医大卒業生が大学に残らないという流れとなり、大変苦戦しました。当時の吉川学長命で、診療科としての呼吸器内科が開設され、当初、私が診療科長を併任しておりましたが、京都大学から中野恭幸先生に赴任していただき、いまでは、関連病院に呼吸器スタッフを派遣出来るまでに大きく育てていただきました。ここ15年間の教室入局者はおよそ50名余り、彼らが教室の将来を担って、さらに発展させてくれるものと期待しております。このような大学での地道な活動は、近年、ご評価をいただき、たとえば昨年度は、4名の教室員がそ

れぞれ滋賀医科大学シンポジウムの奨励賞、優秀研究者賞、女性研究者賞そしてベストティーチャー賞を一挙にいただくことが出来ました。

さて、小生の赴任当初の滋賀県では、不整脈領域の診療が大変遅れており、心房細動のカテーテルアブレーション、致死的心室不整脈に対する植込み型除細動器、慢性心不全に対する心室同期療法、心臓リハビリテーション、さらには、心臓血管外科教室と協力して包括的な下肢動脈閉塞症の治療、大動脈弁狭窄症に対する経カテーテル大動脈弁留置術を、すべて県下で初めて施設認定を取る形で開始することができました。また、大学での研究基盤は、循環器内科学・心臓電気生理学・分子遺伝学で、疾患の遺伝的な背景に興味を持ち、単一遺伝子病のみならず、広く単一塩基多型を含めて病態解明の研究を行いました。幸いにも、湖医会会員を中心に教室に優秀な人材が集まってくれて、多くの研究を展開することができました。

2月の最終講義でもお話ししましたが、大学教員としての通算30年の勤務の半分以上を滋賀医大で過ごさせていただき、自分も湖医会員の端くれにさせていただいたのではないかと思います。この春からですが、AMEDなどの多くの研究費を獲得することができましたので、しばらく特任教授として大学に残る予定であります。今後とも、よろしくお願い申し上げます。

ありがとうございました。

教授退任

ごあいさつ

退職にあたって

～これからの医学と情報～

生命科学講座・生命情報学 教授

小森 優



本年3月に2001年より奉職しておりました生命情報学教授を退職いたしました。卒業生の皆さんには教養の授業以外では顔を合わせる機会が少なく、ポリクリ前の共用試験CBTや卒業式でしか全員と会う機会はありませんでした。教養教育と並行してマルチメディアセンターで大学の情報基盤を作る仕事をしていましたので、センターをよく利用していた人の顔はよく憶えています。

新入生に情報を教えていると、学生の情報環境の変化がよくわかります。2000年代前半はコンピュータを使えない人が多かったのですが、その後高校までに情報の授業を受けるようになり、いくつかのソフトに触れたことがあるという風になり、2010年代になって、やっとパソコンが使えないという人が学年の数%以下となりました。他の科目でもワープロでのレポートを認めるようになり、ようやくパソコンを道具として使いこなせる学生が増えてきました。尤もコピーレポートの増加などという負の効果もありましたが、これを正すのも今日的な道德教育として避けられないところです。また、道具として使う以上、自分が被害者にも加害者にもなり得るセキュリティリテラシーが現在では教育の中心といっても過言ではありません。

ワープロやプレゼン、そして臨床になれば電子カルテを使いこなせるようになるのは必須ですが、もう一歩先を考えると、臨床でも研究でも周りにはコンピュータが組み込まれた機器類で一杯です。ワンパターンの操作で何とか使っているという状態で、状況が変わると途端にどうしようもなくなるというケースが多いように見受けられます。分析器を始めとする最近の機器は様々な先端技術が組み込まれており、これらを全部理解することなど不可能ですが、部分部分はブラックボックスとして捉えても構わないので、全体を理解する力が必要です。この意味での教育は殆ど出来なかったと反省する次第です。コンピュータが貴重だった古い時代では、学生にとって将来使うことのないプログラミングに時間を割いて、多くの学生は困惑していました。プログラムでコンピュータがどのように動作するかといういくつかのパターンを

理解できていれば、機器の動作の理解も容易になります。色々なアプリや装置などを「器用」に使いこなしている方は、情報の教育をちゃんと受けていなくても、コンピュータの動作パターンを自身の理解で結び付けられている人です。医学部では少ない教育機会しかない現状ですが、このように自ら考える人が多くなっていくことを望むばかりです。

次に私自身がやってきた研究や仕事ですが、私は工学系の研究者でしたが、1978年に電子カルテ以前の病院情報システムから医療に関わり始めました。その後、医療画像(PACS)や仮想現実(VR)の医用応用とやや発散気味に研究テーマが変わっていきましたが、一貫して医療への情報技術の貢献という方向で歩んできました。大学での最後の研究は立命館大学と共同で行った新しい手術シミュレータの開発でした。本学には工学技術系の研究者が少なく、立命館が近かったことも幸いしてそちらの学生と交わる機会を得ました。

退職後は、教育病院でもある地域医療機能推進機構(JCHO)滋賀病院で、遅れている電子カルテの導入をお手伝いしています。これだけでなく今後も医療との関わりを続けていく所存です。

退職と同時に生命情報学という名の小講座もなくなりますが、これまでの担当である情報教育は新しい組織の下で続けられることになっています。滋賀医大では生命情報学という名前の下で仕事をしてきましたが、一般に「生命情報学」の主流とされている遺伝子情報やシステム生物学などの分野とは随分異なる領域でした。本学全体を俯瞰すると、この生命情報学の主流の部分をもっと取り入れる必要があると考えていました。しかしこれも、それぞれの研究領域で生命情報学の成果の部分はしっかり取り入れられています。多くの基礎分野を必要とする「生命情報学」自体は他施設のそれと組み合わせる方が現実的なのかも知れません。

最後に、本学の学生たちがより良い医療人として、より優秀な研究者としてはばたいて行くこと、そして地域の医療が持続的に高い水準を保てることを望んで止みません。

私の研究から

難治性肝胆膵疾患に挑む

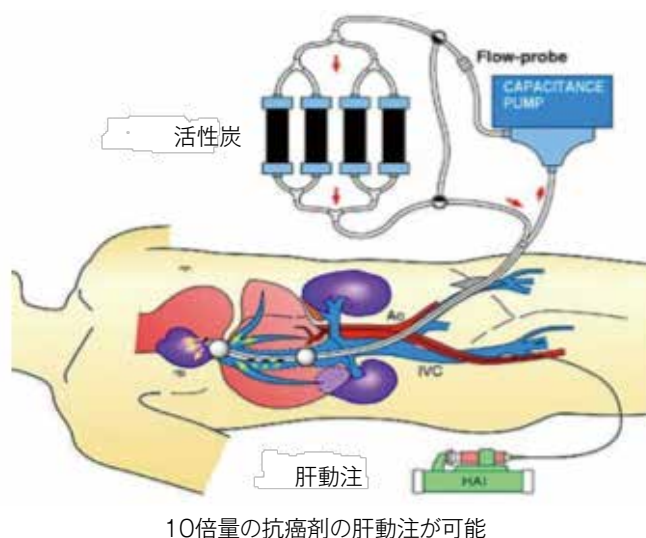
湖医会の皆さまご無沙汰しております。昭和55年入学（6期生）、昭和62年（7期生）卒業の福本巧です。今回、琉球大学医学部耳鼻咽喉科の鈴木幹男教授から推薦をいただき「私の研究から」を湖都通信に紹介させていただくことになりました。「落第生」が母校の同窓会誌に何か書いてもよいものかと躊躇しましたが滋賀医科大学の卒業生にはこんな人間もいる程度の話として何かの参考にならばと思い、今回の鈴木教授からのお話をお受けすることにしました。

私は昭和62年神戸大学の第一外科に入局し、4年間の外科研修の後、平成3年に大学に戻り、肝臓グループの研究生として研究を開始しました。大学院生とは異なり、研究生には2年の期間しかなく、元々期待されていませんので好き放題にやらせていただいたように思います。荒唐無稽な仮説を追いかけていることが多かったのですが部分肝移植や肝臓の新治療法の開発などでマイルストーン的研究を行うことができました。恩師である神戸大学肝胆膵外科前教授である具英成先生に出会えたことがとても

大きかったと思います。その後、具前教授の強い後押しがあり、平成6年から平成8年までドイツフンボルト大学に留学し、脳死肝移植の臨床に従事するとともに肝炎の研究に携わりました。肝炎研究は独学ですがC型肝炎ウイルスの血中動態を解明し、インターフェロン・リバビリン併用療法のプロジェクトを立ち上げ、ドイツおよび日本の第一例目を実施することができました。平成11年に生体肝移植の体制整備のため帰学し、以後は肝胆膵の高難度手術を担当するとともに医工連携による新しい治療法、新たな医療機器の開発研究を積極的に推進しています。平成21年に神戸大学大学院 外科学講座 肝胆膵外科学分野 准教授を、平成29年6月に同教授を拝命しました。現在、神戸大学肝胆膵外科では肝臓移植や肝門部胆管癌など年間400例以上の肝胆膵手術を行っています。

私の研究テーマは難治性肝胆膵疾患の治療限界の克服で、大別するとI.手術の安全性と成績向上を追求した研究、II.難治性癌に対する新治療法の開発、III. C型肝炎の病態解明、IV.新しい医療機器の開発に分けることが

神戸大学が開発した肝臓の治療技術 経皮的肝灌流化学療法



[1]



神戸大学大学院医学研究科 外科学講座
肝胆膵外科学分野 教授

福本 巧 (医7期)

できます。いずれも臨床現場の必要性から着想した研究で、その多くがベツトサイドに届いていることが特徴です。その中のいくつかを紹介したいと思います。まず手術の安全性と成績向上を追求した研究ですが生体肝移植における門脈圧モジュレーションの概念を初めて提唱しました。小さなグラフトを用いた部分肝移植では過剰な門脈流量の調節で生存率が改善します。次に難治性癌に対する新治療法ですが進行肝癌に対する経皮的肝灌流化学療法を開発し、高用量の抗癌剤の肝動注を可能としました。すでに270例以上に実施し、高度進行例でも3-5年の中～長期生存が可能となっています。体内空間可変粒子線療法は外科と放射線の融合技術で、切除不能な腹部・骨盤部腫瘍に対しスペーサー手術を併用することで粒子線治療が可能となっています。これまでに膵癌、肝門部胆管癌など160例以上を治療し、良好な局所制御を得ています。また本療法に用いる吸収性スペーサーを開発、特許取得、臨床試験を終了し、来年度の薬事承認・上市を予定しています。さらに、医工学の連携により

吸収性ステープラーによる自動吻合機、手術後の癒着防止剤、肝癌の新しい腫瘍マーカーなど独創的な医療機器・医療技術を開発中で、これらは特許を取得し、臨床試験の準備を進めています。現在、神戸大学では医療機器開発を加速させるために医工学の全学センターの設立を準備しています。医学とは異なり医工学教育は専門外ですが修士、博士過程学生のカリキュラム策定に奔走しています。

私は外科医ですので難治性肝胆膵疾患の治療限界を克服するため手術手技を洗練し、高難度手術に挑戦してきました。しかし手術療法のみでの治療成績の改善には限界があり、新たな治療技術がどうしても必要です。また日本の医療が世界の中でプレゼンスを示し、リードするには欧米のモノマネではない独創的な日本発の医療技術の開発が必要です。これらを実現するため既成の概念にとらわれず、斬新な発想や未踏の地に足を踏み入れる気概を持った若手外科医を出来るだけ多く育てたいと考えています。



私の研究から

精神科医として「こころ」を 解明し続けること

(公財)東京都医学総合研究所
脳発達・神経再生研究分野 客員研究員
神奈川県立精神医療センター 医療局 専門医療部長
安田 新(医14期)



お世辞にもあまり上手だったとは言えない剣道部の活動に明け暮れ、成績表には、「可」や「良」ばかりが並んでいました。毎年のように留年の危機を迎えながらも平成6年に大学を卒業。色々と迷った末に精神医学講座に入局しました。確か、学生の頃に「研究者になって仮面ライダーを作る」と言っていた同期の森島宏隆先生(現、大阪労災病院乳腺外科部長)からは、未だに「外科系に来ると思っていた」と言われます。

今から研修医時代を振り返ると、「万事、直感に頼りがちで、臨床はそれなりにできて凡そ研究や学問には向かない、物事を系統立てて考えることが苦手な、言われたことだけしかやらない、どちらかというと出来の悪い研修医」だったように思います。それでも、当時の医局長、山田尚登先生(前、副学長)からは、大学院進学を勧められました。平成8年に入学後は、加藤進昌先生(現、昭和大学発達障害医療研究所長、(公財)神経研究所理事長)や石田展弥先生(現、琵琶湖病院理事長)にご指導頂きながら、「聴原性てんかんモデル動物の発作発現機序」をテーマに研究を開始。遅々として進まない状況に対して叱咤激励をうけつつ、なんとか論文が世に出すことができました(1)。

平成12年4月。色々なご縁から東京都の外郭団体が運営する研究所に就職しました。所属する研究室(シナプス可塑性プロジェクト)では、山形要人博士(脳発達・神経再生研究分野長、医師)を中心に、「シナプス可塑性の異常と疾患」をテーマに、研究を行っています。「シ

ナプス可塑性」は、神経科学の専門家以外には耳慣れない言葉ですが、辞書によると、「様々な外的刺激によって、シナプスが変化する性質」のこと。海馬や大脳皮質ニューロンにおける活動依存的なシナプス形態変化の分子メカニズムを明らかにすることは、学習や記憶のメカニズムの解明に繋がると考えられています。また、シナプス形成に関与する蛋白質の異常は、統合失調症や自閉スペクトラム症などの精神疾患の発症機序と関連することが報告されてきました。ここでは、精神科臨床から離れて、遺伝子工学、生化学、細胞生物学及び行動科学的な手技を学びながら、研究に明け暮れる日々が10数年間にわたって続きました。周りには、医師免許取得者はほとんどおらず、理工系の出身者からは半ば素人扱いされるなかで、なかなか論文が出ない状況に鬱っぽくなったり、心身症っぽい症状に悩まされたりしました(涙)。それでも、周囲からの叱咤激励のおかげもあって、神経接着分子Arcadlin(activity-regulated cadherin-like protein)によるてんかん発作後の学習記憶障害の機序(2)、および、低分子量G蛋白質Rheb(Ras homolog enriched in brain)による結節性硬化症に合併する自閉症の発症機序(3、図)を明らかにしました。研究室では、平成30年4月から日本医療研究開発機構(AMED)の「難治性疾患実用化研究事業」から研究費を受託しました。これまでに発見した分子カスケードをターゲットとした、これまでとは全く異なる作用機序を持つ精神科治療薬を開発し、多くの患者さんのお役に立てればと考えています。

[2]

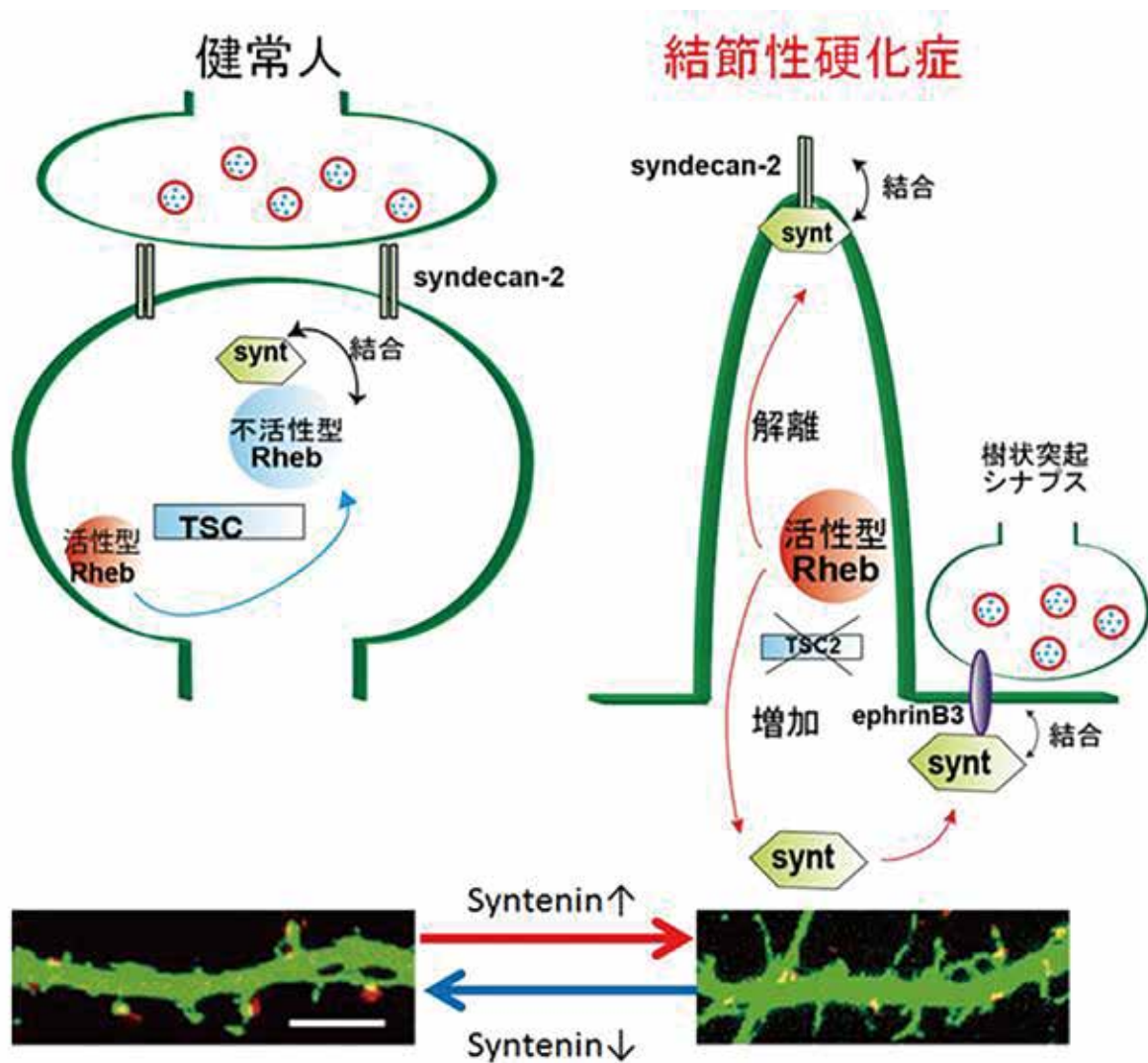


図) 結節性硬化症による自閉症発症のメカニズム

結節性硬化症には自閉症が高率に合併することが知られている。結節性硬化症では、活性型Rhebからsyntenin（アダプター蛋白質の一種）が離れ、スパイン（後シナプス樹状突起棘）形成を阻害する。Synteninを減少させると結節性硬化症でも正常なスパインが回復した。今後は、Rhebあるいはsynteninの機能を抑える薬の探索や開発が自閉症の予防や症状軽減のために必要であると考えられる。（写真は、GFPを発現したマウス海馬初代培養ニューロンの樹状突起をCarl Zeiss社製共焦点顕微鏡LSM780を用いて筆者が撮影したもの）

休む間もなく研究に明け暮れた30代を過ぎて、40歳を過ぎたあたりからは、「これまでの経験を活かしながら、臨床現場で最先端の研究成果を生かす方法について模索するのも悪くない」と考えるようになりました。平成24年4月に神奈川県立の精神科基幹病院（神奈川県立精神医療センター）へ就職。現在は、専門医療部長を拝命し、医療観察法病棟を担当しながら、医療安全部門や感染対策チームの責任者として管理的な業務にも従事しています。平成28年4月の熊本地震の際には、神奈川県の出発派遣精神医療チーム（disaster psychiatric assistant team: DPAT）の一員として被災地に派遣され、活動拠点本部の統括業務を経験しました（4, 写真）。

一見、研究とは何の関係もなさそうな業務に追われる日々を過ごしていた矢先に、神奈川県が勤務先の病院で認知症医療を推進すべく、脳機能画像も取得可能なMRIの購入費用と人件費を予算化（総額2億3千万円）。

臨床だけでなく、県が推進する「未病」に絡んだ「認知症の予防研究」のための準備を平成29年度から5年計画で行うことになりました。これまでの研究歴を買わ

れたのか、私が担当者に指名されましたが、認知症も臨床研究も未知の領域（!）。最近の国内外の状況を整理しながら、昨年11月に「もの忘れ外来」を開設し、本年4月より、最新鋭のMRI（GE社製SIGNA Architect）が稼働を開始しました。将来的には、県の基幹的な役割を持つ「認知症センター」として、更には研究機関や製薬会社等とcollaborationしながらactiveな臨床研究が推進できる体制の整備を目指しています。

最後に、基礎研究も精神科臨床も、本格的に、かつ、長期的に継続するには、直感だけでなく、それなりの忍耐力を要します。労力の割にはほとんど日の目を見ない、地味な作業であるのと、将来の成功が必ずしも保証されているわけでもないのですが、興味のある方はご一報ください。認知症に興味のある神経内科医、精神科医も募集中です。（yasuda-sn@igakuken.or.jp）



写真、平成28年熊本地震DPAT活動拠点本部における全体ミーティングの様子。中央に筆者（平成26年4月26日、熊本県精神保健福祉センターにて）

謝辞

片岡英幸先生（医学科9期、鳥取大学医学部看護学専攻教授）より寄稿をご推薦頂きました。このような形で25年目を迎えた医者（研究者）としての人生を振り返る機会を与えて頂いた湖医会編集部にも深く感謝致します。

1. Characterization of audiogenic-like seizures in naive rats evoked by activation of AMPA and NMDA receptors in the inferior colliculus. *Exp Neurol* 164 396-406, 2000
2. Activity-induced protocadherin arcadlin regulates dendritic spine number by triggering N-cadherin endocytosis via TAO2beta and p38 MAP kinases. *Neuron* 56(3) 456-471, 2007
3. Rheb activation disrupts spine synapse formation through accumulation of syntenin in tuberous sclerosis complex *Nat Commun* 6 6842, 2015
4. 平成28年熊本地震におけるかながわDPAT第2陣の支援活動 *心と社会* 47(4) 78-85, 2016

地域の病院に想う

湖東・湖北圏域の新生児 医療体制の充実を目指して



長浜赤十字病院 新生児科部長

山本 正仁 (医22期)

2002年に卒業と同時に滋賀医大小児科医局に所属し、2007年9月に長浜赤十字病院に赴任してから、約11年間、湖東・湖北圏域の小児医療・新生児医療に従事しております。

滋賀県の新生児医療は、大津・湖西・湖南・甲賀・東近江・湖東・湖北の4つの圏域に分けられ提供されています。滋賀県全体では、毎年約13,000人の新生児が出生しますが、私がいる湖東・湖北圏域ではそのうち約3,000人が出生します。当院は地域周産期母子医療センターとして、早産児（在胎22週から36週までに出生した児）や、低出生体重児（出生時の体重が2,500g未満の児）、先天性疾患、重症新生児仮死、出生後に生ずる呼吸障害など、あらゆる病的新生児の治療体制を整えています。

私が当院に赴任した2007年当時、まだ新生児専門医どころか小児科専門医でもありませんでした。当院は地域周産期母子医療センターを掲げながら新生児領域を専門とする医師は不在で、高度な新生児医療が必要な児は、滋賀医大附属病院や大津赤十字病院で受け入れてもらうことになっていました。

新生児医療は、重症新生児の治療を行うのと同時に、新しい命を新しい家族として迎えてもらえるようにお手伝いするという側面もあります。そのためご家族には、できるだけ毎日面会してもらいたいです。通うのに一時間以上かかる病院での入院は、時間的、経済的にもご家族を圧迫するため、できれば避けたいところなのです。

湖東・湖北圏域の新生児医療を充実させ、このようなご家族の数を減らしたいとずっと思っていました。その当時の竹内義博小児科教授、濱上洋長浜赤十字病院長にお願いし、大阪府立母子保健総合医療センター新生児科や神奈川県立こども医療センター新生児科で研修させて頂き、たくさんの新生児医療を経験させて頂きました。その結果、現在では、私は新生児専門医となり、当院も在胎週数による制限をすることなく、全ての病的新生児を受け入れることができ、赴任当時の目標に近づけたと思っています。さらに後輩からも新生児医療を志す者が生まれ、現在は新生児専門医2名で診療にあたっております。

今後は、当院NICU（新生児集中治療室）の増床改修工事も控えており、さらなる体制の強化を目指し、自己研鑽、後続の育成に力を入れていきたいと思っています。



私の仕事場

滋賀を離れて8年目



聖マリアンナ医科大学 救急医学
川口 剛史 (医29期)

医学科29期生の川口剛史と申します。現在は神奈川県川崎市にある聖マリアンナ医科大学 救急医学に所属しております。本学を卒業した頃は今の職場にいることは全く想像もしていませんでした。

滋賀県立彦根東高校卒→推薦入試の県内枠を存分に活用して滋賀医大に入学→アカペラに没頭しつつなんとか6年で卒業→初期研修も滋賀医大病院。後期も滋賀医大に残るつもりでしたがギリギリになって悩んでしまい、3年目の進路を決めたのは同期の中でも特に遅かったと思います。研修医2年目の12月にバレー部のOB会で先輩に相談に乗ってもらい、翌月その先輩がいた病院への入職を決めました。湘南鎌倉総合病院のERです。

4年間のER後期研修のあとは、重症管理を体系的に学べることを求めて東京ベイ・浦安/市川医療センターと聖マリアンナ医科大学救急医学のたすきがけ集中治療フェローシッププログラムに入り、その縁で今も聖マリアンナで



(1)

働いています。いろいろな職場を転々としていますが、

- 良いものを目指して常に走り続けていること
- 教育と自己研鑽を惜しまないこと

という点は全てに共通していると感じています。いずれも自信を持ってオススメできる施設・部署ばかりです。

滋賀医大では郷土愛と母校愛を、湘南鎌倉のERでは for the patient の精神を、東京ベイICUでは常に高みを目指す姿勢を、聖マリアンナ救命では組織や地域の発展に邁進する力を、それぞれ学ばせていただきました。

聖マリアンナ医大救急医学について少しでもPRさせていただきます。日本の集中治療のリーダー藤谷茂樹教授のもと、

- 生理学とエビデンスを重視したシンプルで標準的な医療の実践
- 米国式集中治療のトレーニングを受けた指導医たちによる教育ラウンド

- 多施設ジャーナルクラブ

- 雑誌INTENSIVIST, HOSPITALIST等の執筆

- RRS(院内急変対応システム)の全国レジストリ

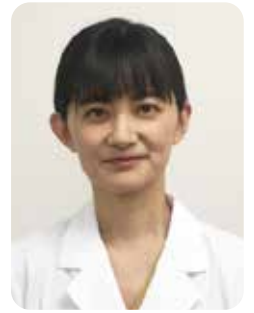
などを通じて、日本や世界に情報や人材を発信することを目指しています。見学は随時受付けておりますので興味を持ってくださった方はぜひご連絡ください。

tkawaguchi@marianna-u.ac.jp

今の環境にフィットしてしまったので、滋賀医大に直接還元できていないことは申し訳なく思っていますが、母校への感謝を忘れたことは一度もなく、大学を出て外で学ぶことを決意した自分の壮行会を開いてくださった救急集中治療部の先生方の懐の深さには頭が上がりません。良い人材や情報を発信し、全国の救急・集中治療の発展に貢献することでお役に立てればと思っています。



精神科医としてできること



大林知華子 (医31期)

こんにちは。31期生の大林知華子と申します。

卒業後、北里大学精神科に入局し、現在は大阪で精神科医として働いております。

北里大学病院には精神科のスーパー救急病床があり、精神科救急からデイケアまで幅広く学ぶことが出来ました。大学当直は忙しく大変でしたが、精神保健指定医・指導医・病棟医・研修医の4人での当直でしたので、当直で鍋を囲んだり、夜間に4人もの患者さんが入院することになり一睡もできなかったりと今では良い思い出です。

関東での生活にも慣れた頃、出産し、近くに親がいない環境での子育てと仕事の両立は大変だったこともあり、生まれ育った大阪に帰ってくることになりました。帰ると決めてからも、保育園や病児保育を探したり、ファミサポを手配したりと、子育てをしながら常勤で働くのは簡単なことではないと実感しました。

現在の職場には、小さな子供を持つ女性医師が3人おり、子育ての相談をしたり、休日に家族ぐるみでバーベキューをしたりととても良い職場環境です。有給休暇もしっかりとることができ、下の子供が1歳になった頃から、連休を使ってシンガポール、ダナン、ハワイ、マレーシアなどに旅行を楽しんでいます。

精神保健指定医も何とか取得し、少しずつ精神科医としての仕事にやりがいを感じられるようになりました。病院には、引きこもりの学生から100歳の認知症の方まで、とても幅広い年齢層の方が来られます。病気は治すべきもの、と考えていましたが、認知症のような治らない病気と付き合っている患者さんやそのご家族と関わっていくうちに、病気を治すのではなく、病気と付き合いながらも日々の生活を楽しく送れるように、様々な職種でサポートしていくことの方が大切だと気付かされました。診察し、薬を処方するだけではなく、それぞれの患者さん・ご家族に寄り添い、産業医との連携やリワークへの参加、ケアマネとの連携など、利用可能な社会資源を探して生活を支援する、そんなところにも精神科医としてのやりがいを感じます。

私の下の子供はまだ2歳で、今後小1の壁を常勤のまま乗り越えられるか分かりませんが、できるかぎり精神科医として働き、地域貢献をすることができれば、と考えています。





X線と内視鏡の比較で学ぶ 「*H. pylori*胃炎診断」

新時代の胃がん検診を目指して



滋賀医大地域医療教育研究拠点 准教授
(兼) JCHO 滋賀病院総合診療科 部長

中島 滋美(医2期)

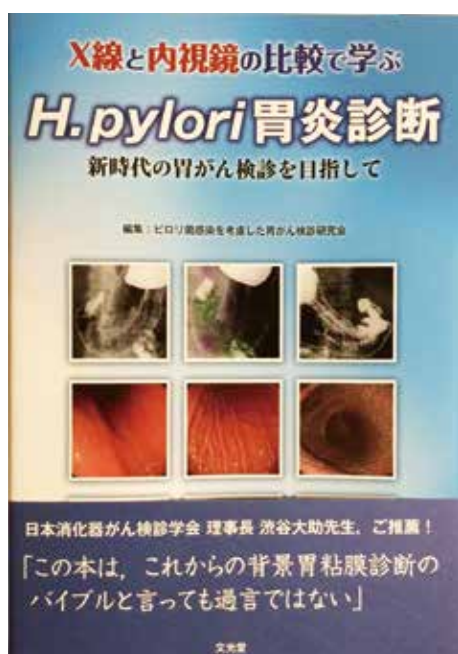
胃がんの99.5%は*Helicobacter pylori* (ピロリ菌)の現感染または既感染者から発生します。胃X線検査(胃透視)や内視鏡検査の画像でピロリ菌の現感染・既感染・未感染が分かるので、画像でピロリ菌感染状況を診断し胃がん検診に応用すべきというポリシーで、2013年滋賀県大津市で「ピロリ菌感染を考慮した胃がん検診研究会(略称:ピロ研)」が発足しました(代表:2期生・中島滋美)。当時学会等では異端視されていたのですが、その後賛同者が増加し、ついに学会も我々と同じような考えになってきました。

本書は、胃X線画像・内視鏡画像・血液検査(血清ピロリ菌抗体検査など)を同時期に実施している症例を呈示しながら、画像でピロリ菌感染状況を診断する方法を解説しています。また、画像や血液検査の盲点に関しても言及し、互いの弱点を補い合う方法も書かれています。

画像でピロリ菌感染診断ができることを知らない人、胃の画像に慣れていない人、あるいはこれからやってみたいと思う人は、ぜひ本書を手にとっていただき、眺めてみてください。とくに胃透視に否定的な人は、ぜひ一度ご覧になってください。目からウロコと言いますか、再発見に出会おうでしょう。

表紙の帯に学会の理事長の推薦文が書かれていることにお気づきになりましたか?我々の主張がついに学会で認められたということを示しています。ピロリ菌感染を考慮した効率的な胃がん検診が全国に広がり、胃がんで亡くなる人が少しでも減ることを願っています。と同時に、検診の効率化により、検診による不利益(X線被曝や偶発症など)の回避や検診費用の削減にもつながります。

胃がん診療や胃がん検診に関しては、日本が世界をリードしています。日本のやり方が世界に広がり、胃がんで亡くなる人が世界中で減少することを願っています。滋賀医大の図書館にも一冊寄贈していますので、ぜひご覧ください。



編集: ピロリ菌感染を考慮した胃がん検診研究会

監修: 中島滋美

(滋賀医科大学卒業・医学科2期生・本研究会代表)

発行所: 文光堂(東京)

発行日: 2018年4月13日

定価: 5,000円(税別)

鹿児島支部会の報告

鹿児島支部代表 愛甲医院
迫田 悟 (医1期)

月日のたつのは早いもので、滋賀医科大学5期生である西尾善彦先生の鹿児島大学大学院糖尿病・内分泌内科学教授就任を機に、滋賀医科大学同窓会鹿児島支部会を発足してから7年になります。

4回目の鹿児島支部会を開催してからのち、様々な事情が重なり、鹿児島支部会を開催しないままになっていました。

日々の雑用に追われていたある日、8期生である木建直哉先生の突然の訃報を受けました。鹿児島支部会には毎回出席くださっており、次の開催も心待ちにされていたのではないかと申し訳ない気持ちでした。さっそく3期生である中野静雄先生にご意見を伺い、数件の会場候補のなかから、日本料理店の『さき川』を予約していただき、平成30年5月12日土曜日、第5回滋賀医科大学同窓会鹿児島支部会を開催いたしました。

1期生から17期生まで、合わせて7名のご参加をいただきました。まず、木建直哉先生を偲んで全員で黙祷をおこないました。その後、会計報告と鹿児島県内在住の卒業生名簿の閲覧を書面で済ませ、西尾善彦先生の乾杯のご発声で会を始めました。学生時代の数々の思い出話や失敗談、ご高名な教授の学会でのエピソードなど話題は尽きず、あっという間に終了時間となってしまいました。

今回は二次会の会場を用意しておらず、『さき川』で解散しました。その後、数名で天文館を歩き、とあるワインの専門店に入り、大変おいしいワインをいただきました。ソムリエの方と対等にワインの銘柄の評価ができる先生方にびっくりしました。いつも二次会までおつきあいくださった木建直哉先生のお顔を思い出しつつ、ひとり最終の新幹線で家路につきました。

来年の開催日を今のうちに決めようとのことで、平成31年5月11日土曜日を次の開催日に決めました。卒業生の先生方、ぜひご出席くださるようお願いいたします。



大阪支部会

「琵琶湖カンファレンス in 大阪2018」

滋賀医科大学救急集中治療医学講座 教授

江口 豊 (医2期)

平成30年6月23日、大阪支部会の学術集会「琵琶湖カンファレンス in 大阪2018」が、ホテルヴィアーレ大阪（大阪市中央区安土町）で開催されました。開催に先立って、世話人会で従来からの取り決め、代表世話人：仲谷吉記先生



生（1期、仲谷整形外科クリニック院長）、（大学）事務局；滋賀医科大学救急集中治療医学講座に加え、大阪事務局として世話人でもある福田正博先生（2期、ふくだ内科クリニック院長）の施設を追加すること、監事に松村一弘先生（11期；滋賀医科大学家庭医療学講座特任教授）を定めることになりました。

基調講演として、座長；松村一弘先生、演者；川端医院院長 川端 徹先生から「神経内科専門医が地域のかかりつけ医として果たす役割」の演題名でご講演を賜りました。神輿のお祭り文化が伝承されている地域の特性を生かしたシステム；「だんじり認知症サポート」と、その後開業された脳

外科、神経内科の先生方と新たに開設された地域中核病院に神経内科との連携体制を構築され、地域の認知症の予防と予後の改善に住民ぐるみで努力されていることは地域包括ケアの理想的な形であると深い感銘を受けました。

特別講演では、座長；福田正博先生、演者；日本生命病院腎臓内科部長/血液浄化センター長 宇津 貴先生から「糖尿病診療における地域格差と病診連携の実践」の演題名でご講演を賜りました。大阪市内と滋賀県甲南病院での糖尿病患者さんの実態と治療法の違いについて述べられ、農繁期や草刈り時期と冬の狩猟期など運動量に合わせて治療を行う必要がある

困難な状況を的確に把握され、標準治療を遵守しながらも低血糖のリスク回避、HbA1C値や血圧の具体的に目標設定についてお話いただきました。実臨床ならではのお話は大変興味深く、患者さんの生活に合わせた医療を行うことの意義につ

いて大いに参考となるご講演でした。

その後意見交換会が全員参加で行われ、活発で和やかな雰囲気の中で親睦を深めました。開催の連絡が不十分であったことと、患者さんや大阪北部地震への対応、さらに医師会との会合への出席などで、出席を予定されていた先生方でお見えになれなかった先生方が多数おられたのは残念でした。

次回は、同ホテルで、平成31年6月15日土曜日、当番世話人宇津 貴先生で開催予定です。連絡の方法を工夫し、さらに多くの先生方にご参加していただけることと、また来年元氣でお会いできることを祈念し、開催の報告とさせていただきます。

同期会

10年後、ぜひまた会いましょう

7期生の駒田(旧姓山本)です。卒後30年同期会に参加してきました。幹事の先生方、事務担当の方々、お世話いただきましてありがとうございます。カメラマン?と思ったら、滋賀医大写真部の部員さんが写真を担当してくださっていました。学生生活も30年前とは随分と変わってきていることでしょう。勉強内容は格段に増えていると思いますが、お忙しい中撮影に来ていただきありがとうございます。

同期会の開催は、平成30年2月17日土曜日でした。平昌オリンピックの最中で、この日は羽生結弦選手がフリーをすべっていた日です。天気が荒れることなく、遠方からの参加もたくさんありました。久々の再会、うれしかったで



福島より卒後30年同期会に参加して

根本医院
根本 久高(医7期)



7期生

おがき耳鼻咽喉科 駒田 佳子 (医7期)



す。会場は琵琶湖ホテルの和室大広間でテーブル席でした。各テーブルでとても話がはずんでいたのですが、部屋は広く、とても快適でした。

会に先立ち、物故者に黙祷を捧げました。彼らのことは、いつまでも大切な存在です。

さて、同期会の様子は、にぎやかで楽しいものでした。ステージに立ってそれぞれ近況などを話しました。二次会と同ホテル内であったのですが、参加者が多く、話は尽きないといった感じでした。

何かにつけ出来が悪いと言われていた私たち7期生ですが、30年経ってみるとみんな、立派な先生になっている。みなさん、ご活躍です。でも、こうして会ってみると、学

生の時と変わっていないな、というのが私の感想です。とにかく、お会いするだけで、集まるだけで喜びであり、楽しい、というのが同期会なのですね。女子のみんなに会えたことは本当にうれしかったです。

正直、前回パスした私は、気おくれしていました。寒い中出て行かず家にこもっていたい気満々、それがわたしだ、と言いたところ。しかも、原稿依頼をいただくとは。いつもくじ運はわるいの。ネガティブですいませんが、これだけは言える、同期会って、とても楽しいです。今回は参加できなかった方々も、メッセージはしっかり読みあげられ承っています。10年後はぜひ、また、お会いしましょう。お元気で!



私は卒後程なく福島に帰り、少子高齢化の著しい阿武隈山系で地域医療に当たり、多くの在宅看取りを経験しました。7年前、福島は原発事故で世界の注目を浴びました。その節、滋賀医大の皆様には多くの激励、アドバイスをいただき、唯々感謝です。今でも毎日福島県ではテレビで県内各地の放射線観測データが流れます。深刻な医師、看護師不足などは相変わらずで、現在新たな大問題が浮上しています。検診で子供たち(事故当時18歳未満)に197例もの甲状腺癌(疑い含む)が発見されました。今のところ放射線との因果関係なしとのこと。その検診に過剰診療、過剰診断から人権侵害との見解もあり、検査の中止、縮小も叫ばれています。癌検診のジレンマのようです。子供たちに心身の傷は深く残ります。既に、セシウム汚染は関西までも及んでいるようです。今後、偏見・差別の広がらないことを願うばかりです。

ところで、高齢入学の私は今年で古稀のおじいさんです。10年一昔。時の経つのは本当に早い。2月17日、琵琶湖で3回目の同期会。卒後30年で恩師の拝顔は叶わず。早速年長の私の乾杯音頭で宴会開始。「7期生は開学以来の劣等生」と言われ続けた同期の仲間。容姿の微妙な変化あれども、皆さん自分の世界で飛翔中。願わくば、まだまだ続く試練の中、忘己利他(もう懲りた?)の気持ちで乗り切りたいものです。2次会まで熱く楽しく語らって酩酊したまま過ぎ行きました。2月は滋賀も寒かった。次回は暖かい季節に会いたいですね。最後に幹事の労を取ってくれた山本育男先生、西村明儒先生、湖医会事務局の皆様にご感謝です。再見。(平成30年4月)

同期会



近江温泉病院 精神科
荻田 謙治 (医17期)

去る2018年2月17日 琵琶湖ホテルで、卒後20年同期会が行われた。私が会場に足を踏み入れた時はすでにほとんどの人が座席についていた。懐かしの面々が並ぶ。みんな40代半ばを過ぎ、さすがに容姿は若いままとはいかないが(変わらない人もいたが)、良い意味でみんな上手く年を重ねてきたように見えた。

参加者40人。加藤研次郎さんの乾杯で会は始まった。「スピーチとスカートは短い方が良いといいますが…」と、「昭和のギャグ」に会場は一気に笑いに包まれ、その後、終始笑いの絶えない会になった。岡の司会で進行し、出席者全員が順に近況報告を行った。

卒後の経過や現在の仕事に触れつつ、何よりもプライベートの話がみんな面白い。私は順番が早めだったのでまだよかったが、終盤になるほど笑いの質も量も上がり、話す方もプレッシャーになったのではなかろうか。育児、趣味、学生時代の話から、イヌ派かネコ派かといったどうでもいいけど笑える話まで個性の出た話が聞けた。また10年前の同期会では、「こんなに忙しくしています。」的な話が多かったように思うが、卒後20年もたてば、みんなどこか余裕があり、落ち着きがあるように見えた。一方で、「マラソンを始めました。」的な健康にまつわる話が増えたような気がする。二次会の最後に、園田が「10年後もみんな元気で会いましょう。」と声をかけていたが、強く同意。今回来られなかった人も含めて、みんな元気で再会したいと思った。

最後に、この同期会の準備・進行に関わってくださった方々に感謝します。

卒後
同期会に

17期生

20年 参加して



滋賀医科大学附属病院血液浄化部 講師
金崎 雅美 (医17期)



2018年2月17日に琵琶湖ホテルで行われた卒後20年同期会に参加しました。この日は40人の懐かしい同期が集まりましたが、驚くべきことにほとんどの人が(一部の方を除いて…)20年前とあまり変わらない風貌でした。

記念撮影の後、岡君の楽しい司会で開会しました。乾杯の挨拶は加藤研次郎さん、学生の時と変わらぬ若々しさでした。しばし食事と歓談タイムの後、全員のスピーチが始まりました。皆さんトークがうまくて、久しぶりに大笑いするほど、本当に面白い近況報告でした。趣味でマラソン走っていますという人が複数いて驚きました。歌や楽器など趣味を広げている人や、子育てと仕事の両立で大忙しという人もいて、みんな充実しているようでした。開業している人は経営の難しさなど愚痴りながらも、皆さんうまくいっているようでした。そして、藤谷君から教授になりますとのサプライズ報告がありました(おめでとう!)。さらに、名前は伏せますが滋賀医大でアブレーションしたとか、脳梗塞になったとか(幸い後遺症はないそうです)、健康問題の報告も多数あり、卒後20年の歳月を感じさせられました。

全員の20年分の仕事とプライベートの報告に時間がかかり、予定時刻を大幅に遅らせての一次会終了となりました。それでもまだしゃべり足りず、ほとんどの人が二次会に移動。二次会は30分しか取れませんでした、おしゃべりに花が咲き、とても楽しいひと時を過ごせました。その後、宿泊する人の部屋で三次会が行われたと思うのですが、そちらには参加できず…残念。

最後になりましたが、幹事の山口君、さかとも、よも、湖医会スタッフの方々、写真係をしてくれた学生さん、ありがとうございました。また10年後に元気でみんなと会えるのを楽しみにしています。

同期会



JCHO滋賀病院 腎臓内科
加藤 紀子 (医27期)

卒後10年 同期

卒業の時から楽しみにしていた10年目の同窓会。ワクワクしながら京都センチュリーホテルに到着すると、学生時代と余り変わらない顔、顔。大学の休み時間の談笑風景にタイムスリップしたかと思う程でした。参加者は38名。京都で昼に開催のため、多い方だったみたいです。

行村(瀬戸)さんの学生時代と変わらない淀みない司会で始まりました。幹事挨拶はさすがの井上君。乾杯は前日(!)に幹事よりバトンを渡されたという木川君で開宴しました。

ビュッフェ形式で歓談後、恒例の参加者近況報告です。スクリーンには入学当時の写真が映され、変わってへんやん!と驚きの声、雰囲気が変わって歓声上がるなど、松居君&宮崎君コンビの変わらないチャチャ入れもあ

りつつ盛り上がりました。一番インパクトがあったのは、森君がうちの病院へ皆をスカウトしに来たで一、と名刺を配って回っていたことでしょうか。爽やかな短髪になり風格を纏わせてイメージが変わっていました。10年の間に転勤で北は北海道、南は福岡まで異動した人、研修を終えて再び滋賀に戻ってきた人、また働き方も様々で、女医としてはキャリアの進め方や子育てとの両立をどうしているのかなど、話は尽きませんでした。

名残惜しい中、記念撮影をして閉会。今回参加できなかった方、10年後には会えたらいいなと楽しみにしています。幹事の皆さん、「湖医会」事務局の皆様、お忙しい中ありがとうございました。

大学時代の懐かしい雰囲気の再来

2018年3月4日、暖かくなり始めた京都にて、滋賀医科大学27期生同期会が開催されました。本会は卒後10年の区切りにて開催されたもので、総勢40名弱の参加があり、実に10年ぶりに苦楽をともにした同期との再会が多数みられました。子連れで参加した者も何人もおり、その様子から私達の卒業から相応の歳月の流れたことをおのずと感じさせました。

各自の近況報告では、久しぶりに大学勤務に戻った者、病院経営に忙しい者、大学院などさらに勉学に励む者、子育てなど家庭の生活を楽しむ者など、多様な「それぞれの10年後」が語られました。中には偶然にも最近職場を同じくした者達もおり、「同期と一緒に働くことで連帯感を持って働けている」など、かつて培われたつながりの深さは現場

27期生

会に参加して

国立がん研究センター中央病院
乳腺・腫瘍内科/先端医療科

下村 昭彦 (医27期)



27期生の下村と申します。先だって行われた卒後10年目同期会に参加させていただきましたので、ご報告させていただきます。27期生の卒後10年目同期会は、平成30年3月4日に京都センチュリーホテルで行われました。幹事は井上明星さんと行村（瀬戸）瑠里子さんに労をおとりいただきました。全部で38名が参加しており、夫婦での参加や子どもを連れての参加者も多く見受けられました。

行村さんの司会で同期会はスタートしました。井上さんの幹事挨拶のあと、学生の頃から飲んでばかりいた木川くんが乾杯の音頭を取ってくれました。木川くんは関東で働いていましたが、いまは小児固形腫瘍を学ぶために滋賀医大小児科に勤務しています。木川くんを始め多くの参加者は関西に在住でした。

私は卒業以来東京で勤務しており、卒業後初めてお会

いする同級生も多いため、参加するまでは緊張していましたが、実際に会ってみると学生の時と同様、とても楽しく話をすることができました。しばらく歓談したあと、各自が順番に近況を報告いたしました。大学で頑張っているもの、一般病院で日々の診療に骨を砕いているもの、開業して経営に邁進しているもの、などそれぞれの今の状況を知ることができました。10年と言う時の流れ（6年の学生生活よりも長い!）を実感しました。

次は卒後20年同期会です。今回以上に、それぞれの置かれる立場も変わっていることと思います。10年後に元気に集えるよう、みんなが健康に注意しながら日々の診療や研究に邁進できることを願っています。

最後に、幹事をしてくださった井上くん、行村さん、大変だったと思います。本当にありがとうございました。

弓削メディカルクリニック滋賀家庭医療学センター 中村 琢弥 (医27期)



でも活着していることを感じさせるメッセージもありました。また欠席者からも多数の近況報告が文章にて共有され、皆の各地で活躍する様子に思いをはせることができました。

さて、会場では実際に久しぶりに再会した者も多かったはずなのですが、不思議なもので直接会えば大学時代とそう変わらない息の合った会話が花咲いていました。その様子から、会場全体が大学時代の、時間を巻き戻したかのような心地よい懐かしさに満ちていました。

様々な思い出話のほか、仕事における情報交換や互いの写真撮影、連絡先交換などなど、あっという間に3時間が過ぎて、盛会のうちを終りました。湖医会のスタッフや幹事の皆様、本当にお疲れ様でした。次の機会もまた楽しみにしたいと思います。

浜松医科大学交流会

1

浜松医科大学交流会を終えて

第43回浜医戦担当委員
住友 志帆 (医学科4年)

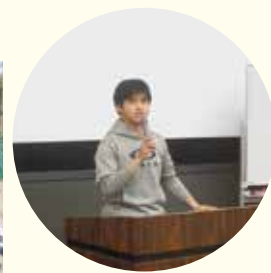
まず、今回の浜松医科大学との交流会を開催するに当たりご尽力いただきました先生方、職員の方々、体育会長の柴田くん、また今回の交流会は浜松医科大学での開催ということで浜松医科大学の先生方、職員の方々、体育会長、関係者の皆様にご尽力していただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

私自身としては4度目の交流会となりましたが、浜松医科大学の仲間には毎年刺激を貰うと同時に年々親交も深まっていると感じています。この交流会は西医体・西コメディカルに向けてさらにモチベーションをあげると同時に学校をあげて他大と交流することにより、多くの学生と知り合う良い経験となっていると思います。

今回の交流会委員の仕事を通じて事前の準備など様々な自身の不手際などを皆様に助けていただきました。大きな交流会を開催する経験は初めてで、全員に満足してもらうためにはどうしたらよいか考え行動することの難しさを実感しました。しかし、各部活楽しんでいる様子を見てこの仕事に携われて良かったと思いました。学生同士の協力でこのような大きな交流会を開催することができ嬉しく感じました。このように一人一人が

協力し合うことで大きな成果を得られたという経験はこれから先の人生において良き自信となり、生きてくるのではないかと思います。

2日間大きな事故やトラブルもなく、無事に交流会を終えることができ、ご協力して下さった関係者の皆様に改めて御礼を申し上げると同時に、また来年以降も素晴らしい交流会が開催できるように後輩の皆さんには頑張っていただけたらと思います。



剣道部

主将 前川 卓人
(医学科4年)

今年度の浜松医科大学との交流戦は浜松医科大学にて5月11日と12日の2日間にわたって行われました。今年度は浜松医科大学にて開催されるということで剣道部員一同、バスで浜松へと向かい、交流戦に参加しました。毎年、一日目に浜松医科大学の剣道部員と一緒に観光を行うのですが、今年は浜松市動物園に行きました。かなり広い動物園で、なかなかじっくり見て回ることができませんでしたが、個人的にはたくさんの動物を見るこ



とができ、良い思い出になりました。二日目にはいよいよ交流戦を行いました。試合結果としては、日ごろの稽古の成果を出すことがなかなかできず、惜しくも敗れてしまいました。残念な結果となってはしまいましたが、大きなトラブルが起きることもなく、無事に交流戦を終えることができたので、とても良い交流戦を行うことができたのではないかと思います。今回の交流戦の経験を活かし、今後も部員一同よりいっそう稽古に励んで参りたいと思います。これからも滋賀医科大学剣道部を引き続きよろしく願い申し上げます。最後になりましたが、交流戦の準備をして下さった関係者の皆様に心より御礼を申し上げます。



浜松医科大学交流会

2

男子バレーボール部

主将 垣内 泰生
(医学科4年)

男子バレーボール部キャプテンの垣内泰生です。今回は浜松医科大学に行きましたが、浜松で交流戦を行うとき、毎回必ずうなぎを食べます。大船という店で、久しぶりに会う、浜松医科大学男子バレーボール部の先輩、同期、後輩と様々なことについて語らいながら、うなぎを食すのが恒例となっています。関西と関東で、方言や文化などが異なった場所に住む方たちとの会話は、毎年毎年新鮮でとても面白いです。

うなぎを食べたあとは、いよいよ試合です。クリクラで上回生が来れず、人数もギリギリのなか、やり慣れない体育館で、コンディションは良いとは言えませんでした。そんな中、浜松医科大学男子バレーボール部の多彩な攻撃や粘り強い守備に翻弄され、ストレート負けを喫しました。とても悔しく感じましたが、こ



の悔しさを糧に西医体などの大会でリベンジできたらと思います。バレーボールというスポーツを通して、仲をより深め合うことができたと感じました。仲の良い友であり、常に互いを意識し、切磋琢磨しあう関係性はとても貴重なものであります。

大学生活の中で、数少ない行事であり、とても楽しむことができました。来年以降は勝利できるように日々練習、勉強に励んでいきたいと思っています。

水泳部

主将 佐野 颯人
(医学科4年)

5月11、12日に行われた滋賀医、浜医交流戦について報告させていただきます。今年は浜松での開催となりました。

水泳部は実際に泳ぎ交流戦を行うのは2日目なので1日目は親睦を深めるレクリエーションなどを行いました。今年は大縄跳びでした。両大学混ざり4チームに分かれて制限時間に何回飛べるのか競いました。どのチームも即興で組んだにも関わらず、作戦を考え、声を出し合って飛ぶなど良いチームワークでした。

その後、場所を大学から愛知県民の森に移してみんなでバーベキューをしました。実習で来られていなかった上回生も途中から参加することでより盛り上がり交流を深めることができました。初めは緊張していた1回生も時間が経つにつれて慣れていき、多くの知り合いを作っていました。

2日目はいよいよ競泳での交流を行いました。今年は浜松医科大学のプールが修繕中ということもあり、浜松にあるトビオというプールで泳ぎました。今年の西医体が行われるプールということもあって全員例年以上に気合が入っていました。結果は今年も引き分けでしたがとても良い交流ができました。三ヶ月後次は西医体でこのプールで成長した姿を見せられるよう滋賀で練習に励みたいと思います。そして浜医の部員にも会えることも楽しみにしています。



浜松医科大学交流会

3

端艇部

主将 松藤 忠和
(医学科4年)



浜医戦で、私たち端艇部は浜松医科大学漕艇部と4つのレースを行いました。男子舵手付フォア、新人男子フォア、女子舵手付クオドルプル、マネージャーの4レースです。男子舵手付フォアは8秒差で敗北、新人男子フォアは勝利、女子舵手付クオドルプルは勝利、マネージャーは敗北で、総合成績は敗北となりました。

私たち端艇部は西医体にて目標を定めて普段から活動しており、特に男子舵手付フォア「暁」は西医体での優勝を目標として昨年秋から練習に励んできました。GWに琵琶湖で行われた朝日レガッタに続く、今シーズン2個目のレースが今回の浜医戦であり、西医体優勝を目標としている以上、必ず勝つべきレースでした。浜医から借りた艇で、最適な調整もできない状態でのレースという悪い条件ではありましたが、そういった条件下でも創部以来ほとんどの年で勝利してきた相手に敗北するという、非常に悔しい結果となりました。

自艇を輸送しないという今回の選択には費用の問題もあった

のですが、借艇でも勝てるという慢心があり、準備が不十分だったことは否めません。今シーズンも残すところあと2カ月ほどとなります。近医体、そして西医体で良い結果を残すため、今まで以上に高い意識を持って日常の練習に取り組んでいきたいと思っています。



ゴルフ部

主将 島袋 正樹
(医学科4年)

私たちゴルフ部はこの度、静岡県菊川カントリークラブにて交流してきました。その日は滋賀では雨が降っていたものの静岡では気持ちの良い晴天でした。浜松医大のゴルフ部員と顔を合わせたのは1年ぶりであったので非常に懐かしい気持ちと嬉しさでいっぱいでした。浜松医大の部員はそれ程多くないのにもかかわらず一人一人が個性的でパワフルなのでとても魅力的な部活だと思っています。雰囲気が良いだけではなくゴルフの実力も伴っているところに毎年驚かされます。ゴルフはプレイ中コミュニケーションを取れるのが特徴的なスポーツです。

その中で我々の部活には無い考え方や指導方法なども教えてもらいました。ここで学んだことを滋賀医大のゴルフ部にも還元できたらなと思いました。そして今年入った新入生には初めての遠征となりましたが非常に楽しんでくれたようです。来年は浜松医大を滋賀に迎える番となります。浜松医大との交流がこれからも続くように精一杯頑張っていこうと思います。貴重なお時間読んでいただきありがとうございました。



浜松医科大学交流会

4

空手道部

主将 金田 章真
(医学科3年)

空手道部は今年も、毎年行っている浜松医科大学との交流戦に参加しました。空手道部は例年通り、合同での練習を行った後、団体戦での練習試合を行いました。合同練習では普段とは違う雰囲気、メンバーで行えたことで滋賀で練習しているだけでは見えてこなかった面を発見できるなど、いい刺激を受けました。練習試合では非常にレベルの高い先輩たちと試合ができる貴重な機会であり、非常に良い経験になりました。これらの経験により、今後の部活全体としての強化の方針をつかむきっかけとすることができました。



また、練習が終わった後も親睦会を行い、お互いに仲を深めることができました。そこで様々な話をすることができました。このように毎年浜松医科大学の人たちと交流を深めることで、競技において新しい発見をすることができるだけでなく、同じ医療人として異なる大学の人たちと交流を深めることで滋賀の医療の特徴や自らの地域への貢献の仕方など

を考える機会とすることができています。

来年度以降も交流を続けていき、よりお互いの競技のレベルを高めるだけではなく、医療人として刺激しあっていきたいと思っています。

訃報

謹んで哀悼の意を表します。

●平成30年1月 3日 木建 直哉 (医8期)

●平成30年2月19日 桑原 一志 (医10期)

●平成30年6月25日 渡田 正二 (医3期)

●平成30年7月22日 和氣 義徳 (医3期)

(特別会員)

●平成30年6月20日 友吉 唯夫先生
(名誉教授・元泌尿器科学講座教授)

事務局から

新入生に「湖医会」を紹介

4月5日に休暇村近江八幡で開催された新入生研修において、同窓会「湖医会」の活動などを紹介しました。今回は、研修医の宮武秀匡先生、音羽祐兵先生、江角裕香先生にも参加いただき、学生時代のこと、医師になって感じる事、近況などお話ししていただきました。



第17回「湖医会賞」受賞記念講演会

演題：**外科医を育てること**
—自分の足跡を振り返って—

静岡県立こども病院 副院長 猪飼 秋夫(医8期)



●日時／10月27日(土)13:00～

●場所／基礎講義実習棟B講義室

会員の現況(8/1現在) 総数 6,615名

●卒業会員 { (学部) 5,138名 (医学科 3,710名
看護学科 1,428名)
(大学院) 14名

●学友会員 ————— 92名

●在学会員 1,064名 (学部: 950名、
博士: 96名、修士: 18名)

●特別会員 ————— 307名 (元職員240名
現職員67名)

年会費について

医学科卒業会員・特別会員・賛助会員

会費の割引…自動引き落とし(口座振替・VISAカード)のすべての利用者は、年会費6,000円が5,000円に割引となります。

医学科卒業会員

会費の免除…40年(40回)分を納入したとき、あるいは、満65歳に達しそれまでの会費を完納しているとき(本人からの申し出による)は、以後の会費は免除となります。

お知らせ

「湖医会」年会費の
自動引き落とし

口座振替をご利用の方は10月12日、
一般VISAカードの方は10月15日となります。
なお、便利な口座引き落としの利用をご希望の方は
事務局までご連絡ください。

名前・住所・勤務先・メールアドレス等が変更になっ
た場合は、メールまたはファクスで事務局
までご連絡ください。



表紙の写真：中庭から管理棟(撮影：学生写真部)

ご協賛ありがとうございます
帝人在宅医療株式会社
株式会社東海日動パートナーズかんさい滋賀支店・株式会社サポルト

(順不同)